

非典型的な微生物学的特徴を有する *Listeria monocytogenes* による感染性大動脈瘤の一例

◎檜物 孝樹¹⁾、木村 圭吾¹⁾、米田 菜乃香¹⁾、吉田 彩夏¹⁾、上田 安希子¹⁾、西 功¹⁾
大阪大学医学部附属病院 臨床検査部¹⁾

【症例】60代男性。既往歴：造血幹細胞移植、膠原病、長期ステロイド内服歴あり。解離性大動脈瘤に対し10年前に当院にてステントグラフト挿入術を施行。2年前にはステントグラフト感染疑いで当院に入院、培養で菌は検出されなかったが、16SrRNA 遺伝子解析で *Listeria monocytogenes* が検出され、抗菌薬による保存的治療を行い、軽快退院。退院後も AMPC 内服を継続していた。現病歴：20XX年5月に血痰増加を主訴に近医受診した際の胸部CT検査で血栓化し安定していた偽腔に新たな air 像が出現し、大動脈肺癰、ステントグラフト感染の再燃が疑われた。前医で血液培養など採取されるも病原体同定に至らず、治療目的で当院入院となった。

【微生物学的検査】PET-CTにて高集積を認めた大動脈瘤に対してDay4にドレナージ術が施行され、血管、大動脈瘤内の膿汁のグラム染色で細長いグラム陽性桿菌をわずかに認めた。培養で菌は検出されなかったが、16SrRNA 遺伝子解析で *L. monocytogenes* が検出された。Day11に胸腹部大動脈人工血管置換術が施行され、ステントグラフト、瘤壁

のグラム染色でも同様に細長いグラム陽性桿菌を認めた。35℃、5%CO₂環境下で48時間培養後、直径1~2mm、白色~灰白色、非溶血のコロニーの発育を認め、グラム染色を実施したところ検体と同様の細長いグラム陽性桿菌であった。質量分析装置で *L. monocytogenes* と同定され、薬剤感受性試験結果 ($\mu\text{g/mL}$) は PCG=2、ABPC=2、ST \leq 0.5、MEPM>2であった。

【臨床経過】入院時よりMEPM、VCMで治療されていたが、16SrRNA 遺伝子解析での菌種判明後、Day15よりABPC、MEPMに変更となった。徐々に全身状態は改善を認め、AMPC、ST合剤の内服を継続したまま、20XX年10月末にリハビリを目的に転院となった。

【まとめ】*L. monocytogenes*による感染性大動脈瘤は比較的稀で、本症例で分離された菌は、グラム染色像、コロニー性状、薬剤感受性試験結果が非典型的であったが、16SrRNA 遺伝子解析と質量分析装置により迅速に同定し、薬剤感受性試験結果を報告できた。
連絡先：06-6879-6680